

尾上兼英『魯迅私論』を通して語る：溝口雄三の竹内好像に対する一考察

王, 晶
九州大学大学院比較社会文化学府：博士課程

<https://doi.org/10.15017/1456048>

出版情報：Comparatio. 17, pp.71-82, 2013-12-28. 九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会
バージョン：
権利関係：

尾上兼英『魯迅私論』を通して語る

溝口雄三の竹内好像に対する一考察

王 晶

はじめに

一九八〇年から一九八一年まで、溝口雄三は四回にわたって「中国の近代」をみる視点」を雑誌『UP』に連載している。これをはじめとして、自らの中国研究方法をめぐる議論を展開しはじめる。その中で竹内好の魯迅観および近代中国観を一つの典型として取り上げて批判している。こうした批判を一九八〇年代を通じて一貫して行っているが、一九九〇年代の後半に入ると、議論の展開に変化が見られる。本論文では、そうした変化を明らかにすることを目的とする。

一九八〇年代から始まる中国研究方法に関する議論を初期段階とすれば、この段階においては竹内好に対する反発が基調となる。そして一九九〇年代後半に至ると、竹内好に対する批判がまったく消えるといった急展開を見せる。本論文で検討するこの変化は、その初期段階から急展開をするまでの過渡期のものとも言える。

従来の研究においては、溝口雄三の竹内好に対する批判もしくは批判的継承が指摘されている。穂山新は「中国を語る作法と「近代」において、「溝口雄三は竹内の課題を多元的な「近代」の理解枠組みの中で引き継ぎ、中国における「中国におけ

る「近代過程」の内部に西洋的な「近代」を超えた普遍性をもった「近代」を見出そうとする溝口の姿勢は、実のところ竹内好とほとんど同じものであったと言えることができる」（注1）と述べて、近代というテーマをめぐる竹内と溝口の共通性あるいは継承関係に注目している。また、曾倚萃は『溝口雄三的中国方法―超克亞洲的知識脈絡』において「竹内と溝口の知識体系は実は相似するところが多い」（原文——竹内與溝口的知識體系實有許多高度相似之處」（注2）と述べている。このように、溝口の知的営為は竹内に対する批判的継承であることは定論となつている。しかしその批判的態度が具体的にどのようなものであるかは、詳細に展開されることはない。本論文は、溝口の竹内批判がたどった具体的な過程を明確にし、それが複雑な変化を含む過程であることを明らかにする。これは後に溝口によって発せられる「日中・知の共同体」活動を理解する重要な一環でもある。

一 「タダの中国」に対する注目

一九八八年八月に、溝口雄三は「「タダの魯迅」と「私」の対話―尾上兼英著『魯迅私論』によせて―」（『中国研究月報』四八六号）を書いている。その中で、一九八八年六月に出版された佐藤慎一訳『知の帝国主義―オリエンタリズムと中国像』が引用文献として紹介されている。引用したのは、本文ではなく訳者あとがきの中の「タダの中国」という言葉であり、「タダ」は文中十回も現れ、一つのキーワードとして使われている。

「『タダの魯迅』と「私」の対話―尾上兼英著『魯迅私論』に
よせて―」における最初の部分は次の通りになっている。

中華人民共和国の成立以来の四〇年を区分してみると
(イ) 建国から文革開始一九六六年までの十数年、(ロ)
七六年四人組逮捕までの文革の十年、(ハ) それ以後現在ま
での十余年、の三つに分けられそうである。この三つをか
りに、(イ)「新」中国の時期、(ロ)中国が「新」を脱いだ
時期、(ハ)タダの中国となった時期、とよんでおこう。(注
3)

文化大革命が終わった後の中国を指す時期の区分として「タ
ダの中国」を溝口は使っている。「タダの中国」という言い方は
佐藤慎一の訳書『知の帝国主義―オリエンタリズムと中国像』
のあとがきの中の用語であり、時期の区分を表すために使われ
ている。

佐藤慎一は一九六九年に東京大学法学部を卒業し、その後近
代中国政治思想史を専攻する。一九七三年四月東北大学法学部
比較政治学担当の助教授となる。一九七九年から一九八一年ま
でカリフォルニア大学バークレー校客員研究員として二年間ア
メリカに滞在した。そしてアメリカで体験した中国研究につい
て一九八二年に「アメリカの中国研究」書いている。その六年
後の一九八八年にアメリカの中国研究者 P. A. ユーエン(注4)
の *Discovering History in China: American Historical Writing on the
Recent Chinese Past* を翻訳して『知の帝国主義―オリエンタリズ
ムと中国像』という題で出版している。これは中国語版の林同

奇訳『在中国発見歴史』(一九八九年 中華書局)よりも早い。
佐藤は、アメリカの中国研究に触発されて、中国研究方法論の
問題に目を向けるようになり、さらにユーエンの著書をいち早
く訳すまでになったことを考えれば、アメリカの中国研究に大
いに刺激されたことが分かる。

『知の帝国主義―オリエンタリズムと中国像』の訳者あとが
きの最初のところで、佐藤慎一は東北大学法学部に勤めていた
時に、学生に竹内好をはじめさまざまな世代の中国論を読んだ
上で「私たちの中国観」という題でレポートを書かせたことを
語り、その中の特に印象に残ったものの一部を抜粋している。
詳細は以下の通りである。

文革当時の日本人が中国に対して抱いていた思い入れを
見ると、そういう共感を抱きうる対象があっただけ幸福な
世代だったとも思うけれど、反面、まるで「信仰告白」を
読まされるようなやりきれなさも感じる。「信仰」を共有
しない人間には全く説得力を持たないという点では空しい
し、「信仰」を異にする人の意見が全否定されるという点
では空恐ろしい。

幸か不幸か、ぼくたちの世代にとっては、中国は「タダ
の中国」になってしまった。中国に熱狂的関心を抱くとい
うことなくった反面、距離を置いて中国を見ることがで
きるようになった。距離を置くということとは、「この視点
から、これだけの材料をもとに見れば、この程度のこ
とはほぼ確実に言える」という、自分の中国観の妥当性の

限界に対する自覚を生み出すことになる。ぼくたちの世代の中国観は、「中国観」というほどの大げさなものにはならないかもしれないが、そのかわり他人の中国観とは競争的に「平和共存」できるだろう。

「タダの中国」になっても、中国と中国史はやはり面白い。いや、「タダの中国」になってますます面白くなった。

さまざまな権威が音を立てて崩壊し、けっきょくのところ自分に納得のいく中国観をきづく責任と権利がぼくたち自身にあることがハッキリしたからだ。その意味では、中国が「タダの中国」になったのは、ぼくたちの世代の不幸というよりは、幸せのような気がする。(注5)

佐藤がこの学生の「タダの中国」をわざわざ引用していることから、この言い方を重視していることが推測できる。原文の中で言われる「タダの中国」とは、文化大革命後の中国を指し、社会主義の中国が崩壊して変化が起こった後の中国を捉える、つまり時期を区分するキーワードとして使われていることは明らかである。また、「タダの中国」を研究する研究者として、熱狂的でなく「距離を置いて」、自らによって客観的に中国を見ることができるようになったことと、「タダの中国」になったという変化に伴う日本の中国研究方法の今後の行方についても言及している。具体的に言えば、西洋資本主義に対抗するといった特定の権威あるいは枠組みにとらわれるのではなく、「自分に納得のいく中国観をきづく」ということが問題となるのである。

佐藤慎一は、なぜ上述した内容を『知の帝国主義—オリエン

タリズムと中国像』のあとがきで取り上げているのかというと、社会主義の新中国から「タダの中国」になったというような変化に伴って、日本における近代中国研究方法も調整をしなければならぬという考えを引き出すためである。そのことは、佐藤の以下の言葉から分かる。

グローバルに見て、中国近代史研究は新たな段階にさしかかっている。第一に、中国近代史研究の主たる生産国は中国・アメリカ・日本だが、中国（と日本）の場合であれば文化大革命の挫折、アメリカの場合であればヴェトナム戦争の挫折と、いずれも従来の認識枠組みの根本的再検討を迫る体験をしたばかりである。第二に、文化大革命以後の中国で、洪水とも言えるような勢いでおびただしい史料の公刊がなされ、従来の枠組みでは説明できない新事実が次々に浮かび上がってきた。つまり、従来の研究の批判的再検討と膨大な新史料とを踏まえた中国近代史研究が、アメリカのみならず、日本でも中国でも、同様に求められているわけである。(中略)コーエンがアメリカの中国研究者に突き付けた問題は、決して他人事ではない。私たちはどのような前提にもとづいて中国研究を行ってきたのか、私たちの中国研究も「アウトサイダー」性の十分な自覚を欠いていたのではないか、今後の研究戦略は如何にあるべきか等、日本の中国研究に即して私たちがみずから考えなくてはならない問題は決して少なくないはずである。(注6)

文革後「タダの中国」になったという変化に触発されて、日

本の近代中国を捉える視座の変化を痛感する佐藤が『知の帝国主義』を訳したことは明らかである。『知の帝国主義』におけるユーンによる一九七〇年代のアメリカにおける新たな中国研究の潮流、つまり「中国自身に即する」アプローチ（China-centered approach）を通して、日本における近代中国研究方法の再検討の必要性を自覚させ、顕著化させようとしていくと考えられる。

こうした佐藤の動きに溝口雄三は独特な形で応答する。佐藤の取り上げている「タダの中国」という語句をそのまま自らの論文「『タダの魯迅』と『私』の対話―尾上兼英著『魯迅私論』によせて―」の中で使用している。このような形の応答は、『知の帝国主義―オリエンタリズムと中国像』に対する他の書評（注7）とは異なり、その関心は訳書全体にあるのではなく、訳者あとがきの「タダの中国」という言葉に集中する。溝口と佐藤の両名は、中国に起こった変化に緊張感を持ち、こうした動きに対応して日本における中国研究方法も変えなければならぬという点において認識が一致していると考えられる。これにとどまることなく、溝口は「タダの中国」を通して「タダの魯迅」を引き出し、自らの議論を展開していこうとすることを次章で検討する。

二 典型への反発およびその対立面の構築

溝口は尾上兼英の『魯迅私論』を通して「タダの中国」から「タダの魯迅」を引き出す。その目的は竹内好による魯迅解釈

と対立させるためである。溝口が竹内好による魯迅像を批判するのは決してはじめてのことではない。しかし竹内好による魯迅像との対立面を明確にするのは初めてである。本章はそうした経緯を明らかにする。

1 尾上兼英『魯迅私論』に対する溝口の注目点

尾上兼英は、一九四九年四月東京大学文学部中国文学科に入學し、一九五二年に卒業する。卒業する一九五二年に魯迅研究会を設立した。この研究会発足については、次のような経緯がある。一九五二年の五月一日のメーデー事件（注8）においては、「墨で書かれたデマは、血で書かれた真実を覆えない」「血債は血を以って償わねばならない」という魯迅の言葉（注9）がスロ―ガンとして使われた。この使用に対して、尾上は魯迅が、どういう状況の中で言ったのか、考えてみる必要を感じ、安易な使用を批判した。「有名人のことばによって、事柄に対する判断の正しさが立証されたとする考え方、教養主義ともいうのでしようか、そういう読まれ方に直感的に反発を感じ」（注10）で、魯迅を正確に読まなければと思つて、一九五二年に魯迅研究会を設立したとされる。後に溝口も魯迅研究会の一員となった。尾上と溝口二人については、年譜によれば、一九六八年―一九六九年の間ともに東京大学文学部助手を担当していた。また、『中国の革命と文学』全一三巻の第一巻尾上兼英・丸山昇編『魯迅集』（平凡社 一九七一年）において、溝口は「葉」、「トロツキイ派に答える手紙」、「徐懋庸に答えあわせて抗日統一戦線開

題に関して」の三篇の翻訳を担当している。

尾上兼英の『魯迅私論』は、一九五〇年代から書いた論文を集めて一九八八年に汲古書院によって出版されている。初出情報の詳細は次の資料一のようにである。

魯迅私論初出一覧

魯迅一人間の教師 吉川哲史編「人間の教師」東洋館 一九五八年 大阪教育図書

『切實思想有鬼似的』から 『魯迅研究』第五号 一九五三年

魯迅の小説における知識人 『東京文藝季報』第四号 一九五八年

魯迅とニータム 『日本中国学會報』十三 一九六二年

進化論とニータム 尾上 丸山編『現代中国文学通集』(一) 一九六三年 平凡社

魯迅と文体 中国語学研究会編『中国語学新辞典』一九六九年 光生館

魯迅におけるニータム (原題「魯迅作品」)

東京大学中国語学研究会編『中国の思想家』下 一九六三年 勁草書房

(原題「魯迅」)

魯迅の「個人主義」と「人道主義」 佐々木基一、竹内実編『魯迅と現代』(第六卷)勁草書房

野原四郎他編『藤野先生と思想』(一) 一九六〇年 弘文堂

魯迅の個人主義と「人道主義」 (原題「文藝界の思想闘争」)

東京大学中国語学研究会編『近代中国の思想と文学』一九六七年 大安

魯迅の目撃した日本入 『日本文学』一五卷二号 一九六二年

『孤獨者』私論 『日本文学』第九号 一九六二年

(資料一『魯迅私論』あとがきより)

最初の論文は、一九五三年に『魯迅研究』に掲載され、その後他の論文が続々と発表されている。管見の限りそれらをめぐる関連の議論は見当たらない。一九八八年に書籍として『魯迅私論』という題で出版されても、それに対する注目は、溝口雄三の「『タダの魯迅』と『私』の対話―尾上兼英著『魯迅私論』によせて―」以外には見当たらない。尾上の魯迅論は、当時それほど広く注目されなかったことが垣間見える。しかし、溝口にとつて尾上の『魯迅私論』は特別な意味があった。溝口は「新」中国の時期、すなわち魯迅が「新」においてこそ「魯迅」であった時期に、じつは氏は、すでに早く魯迅をタダの魯迅として、これに対していた(注11)と述べ、尾上は先見性があると評価している。タダの魯迅という視点をもつ点によって、溝口は尾上を「氏はむしろ魯迅研究会の実を代表した人であったというべきであろう」(注12)と評価しているのである。

溝口は『魯迅私論』全体の中から「魯迅の「個人主義」と「人道主義」という一篇の中の次の部分を特に注目して取り上げている。

とにかく我々の生き方にかかわる作家であるという自覚が友人たちの間でも共通になって降りましたので、……スローガンとしてではなく、もっと深い所で自分の生き方とかかわるように読むという方法―それを「姿勢」ということばで表現し、そのための論争もありました。考えてみれば、竹内好氏の読み方と基本的には一致するのではないか

と思うのですが、……(しかし)なま(傍点は原文のまま
—筆者)の感動を大切にしようと思つた我々の素人つぼさ
が、(どこかに西洋の物差しではかろうとするところがあ
る)「竹内好氏との」やはり分かれ目になっていると思いま
す。(注13)

魯迅を読むとき、「なまの感動」を大切にする尾上の姿勢に溝
口は大いに賛同していることが分かる。だがこれよりもつと重
要な点がある。そうした姿勢が竹内好との分かれ目となる
という点である。上述の尾上の言葉を引用してから、溝口はす
ぐ竹内好の魯迅観を取り上げて対比している。

もっとも素直に読んで読み取れるのは、それが個人の読
者としてのことだ、ということである。魯迅に対する「素
人つぼい」「なまの感動」が、この『私論』の根底にたし
かに流れている。竹内氏が魯迅について「旧」のなかの「新」
(注14)にもつばらこだわり、日本の近現代の意識や主体
にかかわらせたのと、ここがもっとも大きく「わかれ」る
ところである。(注15)

「素人つぼい」と「なまの感動」がなぜ溝口に重要視された
かという点、それは竹内好による「旧」のなかからの「新」
あるいは「日本の近現代の意識や主体」と連動する魯迅観とま
ったく異なるからである。ここにおいて、溝口によって尾上の
魯迅私論対竹内の魯迅論という対立構図が成立するのである。

溝口が竹内好を批判するのは初めてではない。一九八〇年の
「中国の近代」をみる視点」において既に竹内好を批判してい

る。

わたくしたち戦中・戦後育ちの中国研究者のほとんどの
研究起点に、中国への批判的視点というものはなかった。

むしろ中国に批判的かつ蔑視的であり、そのためおのずと
中国侵略に加担することにもなった戦前・戦中の例えば津
田左右吉らの近代主義的中国観を否定的に批判もしくは排
除するところがその起点であった。その場合その有力なよ
りどころの一つが、竹内好氏の「魯迅」や「中国の近代と
日本の近代」にみられる中国観であつたらう。それは日本
のいわゆる脱亜的な近代主義を自己批判し、その反面それ
の対極に押しやられていた中国にかえてあるべきアジア
の未来を憧憬したものであり、端的にいうならば私たちの
中国研究の起点には基本的にこの憧憬がまずあつた。この
憧憬なるものは、さまざまの日本内的自己意識、すなわち
日本の近代百年にかかわるさまざまの反あるいは非日本意
識の対極に、いわば反自己意識の投影として自己内に結ば
れたそれに向けられたもので、だからそれはあらかじめ主
観的なものであつた。(注16)

竹内好の中国観を「憧憬」とか「主観的なもの」「中国への批判
的視点というものはない」と批判していることは上述した内容
から分かる。しかし一九八〇年の一方的な批判とは異なり、一
九八八年に至って溝口は尾上の『魯迅私論』との比較を通して、
竹内好の魯迅像の対立面を確立しようとしていることは明らか
である。

2 対立構図の確立

尾上の『魯迅私論』の中に「孤独者」私論」という一篇がある。ここでの「私」は作品の中の主人公である「私」を指している（注17）。つまり、魯迅の作品の主人公「私」に対する著者尾上の分析や見方が『魯迅私論』の「私論」の意味である。溝口ももちろんこの意味で使うが、それ以外にもう一つ、著者尾上の「私」を引き出している。

『私論』の「私」は、読めば明らかのように、魯迅の作品にしばしば真の主人公として隠然また顕然と登場する「私」であり、要するに『私論』とは、その魯迅の「私」

と尾上氏の「私」の「深い所」での対話でもある。（注18）溝口の重点は『魯迅私論』において、尾上がどれほど作品中の「私」と対話できているかにあるのではなく、尾上個人の私見の「私」という姿勢にあることは何えよう。溝口にとってこの姿勢は魯迅研究の「実」とつながり、「タダの魯迅」という視点に立脚しているかどうかを判断する根拠となると言ってもよからう。

名を「新」なり「旧」なり「近代」「意識」「主体」なり「アジア」なり「解放」なり「革命」なり「ヨーロッパ」なり、とすれば（中略）それらの名を脱いでしまえば、実とはタダの魯迅すなわち文学者魯迅以外のなにものでもなからうからである。（注19）

溝口は、「名」と「実」の対立構図を作り、そして尾上「氏は

むしろ魯迅研究会の実を代表した人であったというべきであろう」として、尾上を実のほうに分けている。なぜかというところ、『魯迅私論』には、溝口がもつとも批判する「名」つまり「新」なり「旧」なり「近代」「意識」「主体」なり「アジア」なり「解放」なり「革命」なり「ヨーロッパ」なりなどの言説が一切ないからである。

溝口は尾上が『魯迅私論』で展開する「素人っぽい」と「なまの感動」という一人の読者としての私見の姿勢を肯定して、「実」のほうにふり分ける。根本的な基準とは、「新」や「旧」などの言説が入っているかどうかであることは分かる。入っていれば「名」となり、入っていないければ「実」となる。言い換えれば、竹内好による魯迅像のキーワードが入れば、それは「名」となり、「私」の姿勢ではなくなるといふ明快な構図を溝口は作ったのである。

ここまで述べてきたことから、尾上の『魯迅私論』が溝口に高く評価されている理由は、竹内好の魯迅観と関係する形容詞が一切入っていないからであることは明らかになったと思われる。溝口のこの構図は、かなり明快且つ簡易な構図であると言えよう。竹内好の魯迅解釈と関係する形容詞が入っているかどうかを基準にするという溝口の極端な方式をみれば、竹内好によって築き上げられた魯迅像を徹底的に拒否しようとしていることがうかがえる。

三 もう一つの問題意識—時代と意識のずれ

本章では『魯迅私論』に対する評価を通して、研究対象である中国の現在置かれている状況とそうした事態に対応できる意識を研究主体として持つでいるかどうかというものを溝口が問題としていくことを考察する。この問題意識は溝口の強烈な竹内批判に隠されて、見逃されやすいところである。こうすることで、なぜ「タダの魯迅」と「私」の対話—尾上兼英著『魯迅私論』によせて—の最初のところで溝口が「(イ)「新」中国の時期、(ロ)中国が「新」を脱いだ時期、(ハ)タダの中国」(注20)といった三つの時期をまず取り上げているのか、その理由がわかってくるだろう。

1 「反感から反発へ」

溝口は一九六三年六月から一九六六年五月まで四回にわたって、論文を『魯迅研究』に連載している(注21)。一九六〇年代から竹内好によって築き上げられた魯迅像に不満を持っていた。『一件小事』をめぐる『呐喊』覚え書き(2)―において「私が(中略)所謂魯迅読者のゆがんだ対魯迅観—絶望や暗黒という語を魯迅の形容詞のようにしたがる安易な感傷的魯迅観—に常に反感を覚えていたからである(注22)と述べている。魯迅といえば絶望や暗黒などを結びつける安易な図式に溝口は反発している。こうした図式が固定して継承されていくことにさらなる不満を感じ、その根源となる竹内好をより厳しく批判するようになる。

「中国人に対する絶望」あるいは「社会と人間の落後に對するどす暗い(ナント文学的表現であることか!)悲觀と懷疑」が、魯迅にはあった、という前提を出発点にして、いる点で、両者(細谷正子と伊地智善繼を指す—筆者による)は共通している。(中略)私は細谷、伊知地(伊知地は間違いである。正しいのは伊地智である—筆者による。)両氏の見解に同意できない。これはいわゆる「竹内魯迅」の悪しき影響の表れなのかもしれない。(注23)

一九六〇年代から、溝口は暗黒・絶望・悲觀などの形容詞イコール魯迅像といった研究傾向の根源を竹内好による魯迅像に帰結するとし、それに対する不満を述べていた。ただ、それはまだ反感を表明する程度にとどまっていたことは明瞭である。しかし一九八〇年になると、より明確な形で批判を展開し、反発する対象も一九六〇年代よりも増えるのである。一九八一年に至って、溝口は「中国の近代をみる視点」を書き、その中で竹内の『魯迅』以外に「中国の近代と日本の近代—魯迅を手がかりにして—」も取り上げて批判している。そして一九六〇年代の暗黒や絶望と言ったことばに代表される竹内好の魯迅像のほかに、近代中国観をも批判するようになる。

「東洋」主体的の中国近代に対する「何物でもない」没主体的の日本近代としてそれは立ち現れたわけだが、思えばこのひずみは、アジアを「非」ヨーロッパとして峻立させたいというわたしたちの大げさに言えば百年來の主觀的願望からであるものであり、わたしたちの中国近代に對

する自己否定的憧憬というのも、突き詰めていけば「非ヨーロッパへの憧憬であったと極言できる。」(注24)

一九六〇年代から一九八〇年代に至って、溝口の竹内好に対する批判の対象の中に、その魯迅観に加えて近代中国観をも入ってくることになる。こうした過程において、竹内好に対する批判は一貫して、一九八八年の「タダの魯迅」と「私」の対話―尾上兼英著『魯迅私論』によせて―においても、引き続き竹内好を批判している。しかし竹内好批判には、溝口のもう一つの問題意識が隠れている。それは時代と意識のずれである。

2 もう一つの問題意識―記号化・実体化批判の顕著化

一九八八年になって、溝口は竹内好への一方的な反発から視点を移し、「タダの中国」になったという変化と研究者の意識のずれの方に批判の重点を置くようになる。こうした変化は、尾上の『魯迅私論』に対する評価からも垣間見える。溝口は、尾上が竹内好魯迅のように「旧」や「新」などの「名」にこだわらないことを賛同すると同時に、「新」中国の時期、すなわち魯迅が「新」においてこそ「魯迅」であった時期に、じつは氏は、すでに早く魯迅をタダの魯迅として、これに對していた」ことに特に注目して評価している。溝口は尾上には先見性があったと言おうとしているように読み取れる。この先見性は他でなく、「新」の時期に「タダ」の視点を持つていないことである。この「タダ」の視点とは竹内の魯迅像からは出てこないことを

繰り返しながら次のように述べている。

中国が「新」を脱ぎ捨て、タダの発展途上国中国になったとき、「魯迅」も「タダの魯迅」になった。(中略)日本人の中国の近現代に対するかかわりの特殊性、中国の「旧」と「新」、あるいは「旧」から「新」へをみる眼の特殊性といったものがあつたと思われるが、相手がタダの魯迅であれば、それらのメンドウもいまや自然と消滅した。読者もタダの外国人の読者となつた。暗黒とか掙扎とか虚妄とかは、当時の中国のことであつて、いまの日本人読者の主体まして日本の近現代にかかわることではない。かかわるとすれば、一人の作家に対する一人の読者としての個人の内面関係においてのことである。(注25)

「新」の時期と「タダ」の時期が明確に分けられるように、中国に対する認識も「新」と「タダ」できつちり分けられるべきであるというのが、溝口の述べたいことであると考えられる。暗黒や掙扎、革命や解放と言つたキーワードは「新」の時期においてはよいけれども、「タダ」の時期になつた一九八〇年代の時点では、尾上『魯迅私論』のように「タダの中国人との個人レベル、内面レベルの「私」の付き合いを根幹とするのがもつともよい、とこの書物はついでに教えてくれている」(注26)と溝口は述べている。中国で変化が起こつたにもかかわらず、竹内好による魯迅像と近代中国像を一つの基準として墨守し、永続的、実体的で堅固な枠組みのように扱うことに溝口は批判の矛先を向けているのである。

溝口が、竹内好の魯迅論を批判しているのは「タダの魯迅」と「私」の対話―尾上兼英著『魯迅私論』によせて―」を読めば分かるが、その射程はそれだけではない。『魯迅私論』が示しているように、「タダ」の時期になったのに、それに先立つ「新」の時期の認識を依然として持ったままでよいのかという疑問が突きつけられている。おそらく溝口は「新」を脱いだ中国から「タダ」になった中国という変化に応じる認識・考え方の変化をもつとも要求していると考えられる。それが竹内好に対する激しい反発、および尾上兼英に対する高い評価という形で表われていると考えられる。こうした溝口の一つの典型を実体化、神話化することに対する批判意識が、後の「日中・知の共同体」活動と繋がっていくのである。

おわりに

竹内好による魯迅観および近代中国観が、時代の変化を無視して恒久的な図式として継承されていくことを溝口は強く批判した。その批判は、対立構図と基準を明快な形で展開することで行われていることを本論文で考察した。また、尾上兼英『魯迅私論』に対する溝口の評価から、中国がおかれている時代の変化とそうした変動に対応した中国研究者たちの意識という問題を溝口が考えていることを明らかにした。こうした問題意識に基づいて、もう一度溝口の竹内好に対する批判を振り返ってみれば、溝口が反発しているのは、竹内好個人の見解だけではなく、竹内好によって構築されたモデルが一種の仮説となるに

もかわらず、それを一種の実体的な永続的な枠組みと見なし、時代の変化に応じて変更することも考えず、そうした枠組みを固持していこうとする体制であると言ってもよからう。

〔付記〕

- 一 中国語引用文の訳は引用者による。
- 一 引用文の傍線は引用者による。

注

(注1) 樋山新「中国を語る作法と「近代」」『社会学ジャーナル』三二―二〇〇七年 八八頁。

(注2) 曾倚萃『溝口雄三的中國方法―超克亞洲的知識脈絡』國立台灣大學政治學系中國大陸暨兩岸關係教學與研究中心 二〇〇八年 一一一頁。

(注3) 溝口雄三「『タダの魯迅』と「私」の対話―尾上兼英著『魯迅私論』によせて―」『中国研究月報』四八六号 一九八八年 三三頁。

(注4) 一九三四年生まれ。シカゴ大学を卒業し、一九五五年にハーヴァード大学大学院に入学し、当時中国研究の中心的指導者となるフェアバンクやシュオルツのもとで中国史を専攻する。一九六一年に一八六〇年代のキリスト教布教に対する中国人の反応を分析した論文を執筆して博士号を授与される。著書には *Between tradition and modernity* :

Wang T'ao and reform in late Ch'ing China, Harvard

University Press, 1974; *Discovering History in China: American historical writing on the recent Chinese past*, Columbia University Press, 1984; *Fairbank Remembered*, Harvard University Press, 1992; *History in three keys: the boxers as event, experience and myth*, Columbia University Press, 1997. などがあげられる。以上取り上げた著書のいずれも中国語に訳されている。日本語に訳されているのは『知の帝国主義』だけである。

(注5) 佐藤慎一訳『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』平凡社 一九八八年 二八三頁。

(注6) 前掲(注5)一九〇〇—一九一頁。

(注7) 書評は具体的には以下のものがある。

① 並木頼寿「『知の帝国主義』を読んで」『中国研究月報』四八五 一九八八年。

② 張士陽「ポール・A・コーエン著／佐藤慎一訳『知の帝国主義』」『史學雜誌』九七 一九八八年。

③ 井尻秀憲 書評「P. コーエン著 佐藤慎一訳『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』」『国際問題』三四五 一九八八年。

④ 河田悌一 書評「『知の帝国主義』」『思想』六月号 一九八九年。

⑤ 今沢紀子 書評「P. A. コーエン著 佐藤慎一訳『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』」『歴史学研究』五九五 一九八九年。

(注8) 血のメーデー事件は、一九五二年五月一日に東京の皇居外苑で発生した、デモ隊と警察部隊とが衝突した騒乱事件である。事件は一部の左翼団体が暴力革命準備の実践の一環として行われたものと見られている。

(注9) この言葉は、一九二六年の三月一八日に魯迅の教え子たちが素手で請願に行き、衛兵の発砲で死者四七人、負傷者一五〇余人にのぼる犠牲者を出した三・一八事件の後に書かれたものである。

(注10) 尾上兼英 『魯迅私論』 汲古書院 一九八八年 一三三頁。

(注11) 前掲論文溝口雄三「『タダの魯迅』と『私』の対話—尾上兼英著『魯迅私論』によせて—」三四頁。

(注12) 同右。

(注13) 同右。

(注14) 旧と新について、竹内好は次のようなことを述べている。

「魯迅のような人間が生まれてくるのは、激しい抵抗を条件にしなければ考えられない。(中略) あらゆる進歩への道が閉ざされ、新しくなる希望が砕かれたときに、あのような人格が固まるのだらう。古いものが新しくなるのではなく、古いものが古いままで新しい、というぎりぎりの存在条件を備えた人間が可能になるのだらう」(竹内好「中国の近代と日本の近代—魯迅を手がかりにして—」『日本とアジア』竹内好評論集第三卷 一九六六年 筑摩書房 三九頁)。竹内好において旧と新が魯迅の性質を現すキーワードとなる。

(注15) 同前掲注(11)。

(注16) 溝口雄三「中国の近代」をみる視点『UP』九六号 一九八〇年 三頁。

(注17) 原文の中で「私」は次のように現れている。「視点に設定された「私」は、魏連岷に対してどういう位地を占めているか。最初は傍観者として登場するが、失業中に連岷の客間を訪れる一人となつて接近する。深入りするのは、連岷が失業してからである。要路者から攻撃され、すべての人から敬遠されて失意のどん底にいる彼を、土産をもつて訪れ、まるで寄り添うように苦悩を共感し慰め熱い同情を寄せるが、「私」には救いだす力はない。(中略)このように、戦い、傷つき、倒れた一人のインテリを作者魯迅はどう見ているか。早く目覚めて戦い、敗れて戦線から退き、あるいは墮落したインテリたちを、作者は「私」の目を通して批判している。自分の中にもある苦悩をすつかりさらけ出してかみ締めながら、正しい道を見つけ出そうと努力する誠実さを出発点として、連岷と「私」の目を通して現実を分析し、ささやかながらも前進の方向を見つめている。それは「人生の浮沈は定まりなく、失意の人といつても、永久に失意の人であるわけではない。」という確信の上に立っているからなのである。尾上兼英『魯迅私論』汲古書院 一九八八年 二五八〜二六〇頁。

(注18) 前掲論文溝口雄三「『タダの魯迅』と『私』の対話―尾上兼英著『魯迅私論』によせて―」三五頁。

(注19) 前掲注(19)三四頁。

(注20) 前掲注(19)三三頁。

(注21) 一九六三年から一九六六年まで溝口は『魯迅研究』に連載している。取り上げた(2)以外に他の論文を以下で取り上げる。

① 『呐喊』―覚え書き(1)― 『魯迅研究』三一号 一九六三年六月

② 『一件小事』をめぐつて― 『呐喊』覚え書き(2)― 『魯迅研究』三二二号 一九六三年一〇月

③ 『頭髮的故事』をめぐつて― 『呐喊』覚え書き(3)― 『魯迅研究』三三二号 一九六三年一二月。

④ 溝口雄三「魯迅における知識人と民衆― 『呐喊』覚え書き(4)― 『魯迅研究』三五号 一九六六年五月。

連載以外に「中国の魯迅研究と日本の魯迅研究」『魯迅研究』三四号 一九六五年四月 という論文もある。

(注22) 溝口雄三『一件小事』をめぐつて『呐喊』覚え書き(2) 『魯迅研究』三二二号 一九六三年 三頁。

(注23) 前掲注(22) 四頁。

(注24) 溝口雄三「中国の近代」をみる視点『UP』九九号 一九八一年 二九〜三〇頁。

(注25) 前掲論文溝口雄三「『タダの魯迅』と『私』の対話―尾上兼英著『魯迅私論』によせて―」三三〜三四頁。

(注26) 前掲注(25)三五頁。